

有島武郎とE・S・ダニエルの農場

— ニューハンプシャー州グリーンランドでの労働体験 —

尾 西 康 充

—

一九〇四年一〇月から米国マサチューセッツ州ボストンにあるハーバード大学文学部 (Faculty of Arts and Sciences) で大学院の授業を聴講していた有島武郎は、夏期休暇が近づいた一九〇五年六月二日、ニューハンプシャー州ロックンガム郡グリーンランドに赴いて七月二四日まで農場で働いた。有島の日記「観想録」には「Bostonヲ去ツテGreenland, N. H.ナルE. S. Danielナル人ノ下働キトナランガ為メニ阿部三四君ト共ニ汽車ニ投ズ」(一九〇五年六月二日)とあり、ここには同時に春雨に詠歎するという伝統的なテーマに従った五七調の「車中ノ駄吟」も記されている。さらにこの年の日記には、書き込まれた日時が不明の「Greenlandニ働キツ、アリシ頃、労働者ノPolandヨリ来レルモノアリ。毎夕violinヲカキナラス」という言葉が書き加えられ、農場で一緒に働いていたポー

ランド系移民労働者によってバイオリンで演奏されたポーランド民謡が五七調の長歌として日本語に翻案されている。伝統的な韻律をもなう日本語が有島の口を衝いて出たのは、このときたえず祖国の運命を案じていたからであろう。

折しも、一九〇四年二月一〇日にはじまった日露戦争は一九〇五年五月二七日の日本海海戦でロシアのバルチック艦隊が敗れ、八月一〇日からポーツマスで日露講和会議が開かれるところであった。グリーンランドと同じニューハンプシャー州ロックンガム郡にあるポーツマスは、グリーンランドから北東約七キロメートル、ボストンから北に約九〇キロメートルの場所にある。有島は両親に宛てた書簡のなかに「バルチック艦体ノ噂ハ当地ニても一時やかましく候ひし所近頃ハはたと沙汰やミ相成候」(一九〇五年五月一六日)、「当地ニてハ米国の大統領周旋して平和会議開かるべしとの噂一時非常に高く或ハ事実として現ハれ来らんかと鶴首罷在候処夫れもドーヤ

ら水泡と相成候様なる有様心細き義ニ有之候」(一九〇五年七月二日)などと記し、現地の動靜に注意を払っていたことが分かる。

筑摩書房版『有島武郎全集』の別巻年譜には、有島は一九五〇年六月一二日から七月二四日まで「グリーンランドの農家E・S・ダニエル方」で働き、「週給四ドル、仕事は農作業・家事と苛酷」なものであったとある。そもそも有島がポストンを離れて農場で働くという決意をしたきっかけは、「自活之道」を講じようとしたことであつたと両親に宛てた書簡(五月二六日)に記されている。

此夏ハ二ヶ月程少年学生之天幕旅行ニ随従し自活之道を講ぜんとしホ、契約も相調ひ申候 以前とハ異り病院などにハ無之候故身心共ニ陽暢して保養にも可相成かと存居申候、所ハ唯今居候マサチウセツト州の稍北方ニユ、ハンブシヤと申候所ニ有之候 松柏の類富かなる山隈水廓ニ候由私ニハ是れが何より難有御坐候

有島は今夏二ヶ月ほど「少年学生之天幕旅行」に随行して「自活之道」を講じるつもりであると、すでに「契約」もほぼ調つたというのだが、ニューハンブシャー州が自然環境に恵まれていることを有り難がる以外、そこでどのような生活を送るつもりであるのか、具体的な内容は一切語られていない。「松柏の類富かなる山隈

水廓」と表現されている通り、ニューハンブシャー州のあるニューイングランド地方は森林資源が豊かであつた。

他方、この書簡のなかで「以前とハ異り」とあるのは、ハヴァフォード大学大学院を修了した有島が一九〇四年七月一九日から二ヶ月間、ペンシルベニア州フィラデルフィアにあるフレンド精神病院で看護士として働いたことを指す。自伝的小説『迷路』(有島武郎著作集第五輯、一九一八年六月、新潮社)には「女の声と説経の声と同じ強さで心を牽くといはれる歳頃に、彼れが擇み取つた信仰の生活も、二ヶ月の狂癪病院の生活の間に綺麗に崩してしまつた」とあるように、院内で目撃した性的な光景によつて主人公Aは性的衝動を覚醒させ、「悵鬱」に陥つてしまふ。

有島が「身心共ニ陽暢して保養」になることを期待してグリーンランドの農場で働きはじめた頃に記された書簡(一九〇五年七月二日)をつぎに見てみよう。

学位を取るの希望ハ無之候ひし事とて終末の試験頃より出席を止め夏期間之仕事を見附け出すが為めニ新聞ニ広告其他之事にて一寸多忙を極め居候処幸ニ一ヶ所当地ニ於て四百エーカー程の農場主より内働きの口有之先月十二日一人の学友阿部三四と申す法科大学出の人と此ニ参るコトに相成申候ニニューハンブシャーイヤーと申候得者米国北部ニある一小州にて旧くより開け

たる所ニ御坐候得共辺僻之土地なれば開け方も遅く一見北海道のさる方を思ひ起さしめ申候 主人夫妻ハ格別親切の人取扱ひもよく御坐候得共労働ハ中々烈しく朝は五時半頃より午後二時間頃迄夕方ハ五時より七時半頃まで台場の手伝ひ室の掃除など慣れぬ仕事として時々滑稽を演ずるも一興ニ御坐候 兎ニ角茲ニて働き居候間は食費室代ハ向ふ持ちにて一週間四弗づゝを得るコトニ御坐候得者先づ費用ハなくして相済ミ可申候

右の書簡によれば、有島は「新聞ニ広告其他之事」をして就職口を探していたところ「四百エーカー程の農場主より内働きの口」の提示があつて、六月一二日に学友の阿部三四とともにニューハンプシャー州に赴いた。「主人夫妻ハ格別親切の人」であつたが、毎日の労働は「中々烈しく」、午前五時から午後二時まで、午後五時から七時半まで働かされた。食費と部屋代は農場主が負担し、賃金は一週間四ドル支払われたという。他方、有島はその土地が僻地で開拓が進んでいないことに「一見北海道のさる方」が思い出されるといつて親しみを抱き、「台場の手伝ひ室の掃除など」は「慣れぬ仕事」ではあるものの「時々滑稽を演ずるも一興」と感じて緊張を解きほぐそうとしていることなどから、有島が農場の暮らしに充実感を持ちはじめたことが分かる。

このように有島が農作業と家事に勤しんで「自活之道」を講じよ

うとしていたことは、『迷路』のAがボストンの都市生活では「衣食の問題に頭を悩まさないですむ境遇に置かれるので、その暗い力は純粹に暗くなつて行つた」と表現されるのに比べて、農場では「若い彼れの心には本統の若々しさが本統の道筋から頭を擡げ出したやうに思はれた」と対照的に描かれることになる。有産階級出身の有島にとって他の労働者にまじつて働く体験は生涯を通じて、フレンド精神病院とグリーンランドの農場の他にはなく、とりわけ後者の記憶は、最晩年に至つて北海道胆振国虻田郡特太に所有していた自分の農場を小作人に解放する際に、小作人の境遇と心理を理解するうえで大切な手がかかりとになつたであろう。有島が滞在したボストンの二軒の旧居は小玉晃一氏と栗田廣美氏によつて所在がすでに明らかにされているにもかかわらず、グリーンランドの農場に関しては、高橋隆氏が「有島武郎とグリーンランド」(『有島武郎と場所』、有島武郎研究叢書第一〇集、一九九六年七月、右文書院)のなかで農場の概要とダニエル家の系譜を明らかにして以来、研究は進められていない。そこで本稿では、二〇〇九年七月三日から九日まで渡米しておこなつた現地調査にもとづいて、有島におけるグリーンランドでの労働体験の意味について論及してみたい。

二

グリーンランドはニューハンプシャー州ロックンガム郡にある町

で、総面積三四、四平方キロメートルのうち湖沼が七、三平方キロメートルを占める豊かな自然環境のなかに三、三九五人が住んでいる。ボストンから北へ約八〇キロ、今日では片側三車線の高速道路を利用する人が多いが、有島の時代は鉄道を利用してボストンとの間を往復するのが一般的であった。町にはめばしい産業がないものの、ボストンよりも気候がおだやかなので別荘地帯として発展し、近年ではボストンに通勤する人たちのベッドタウンになっている。歴史的に見るとグリーンランドはニューハンプシャー州のなかでも早い時期に建設された植民地の一つで、一六三八年にポーツマス教会区の管轄とされ、一六四〇年にフランシス・シャンパーナウン大尉 (Capt. Francis Champenowne) が入植してこの土地をグリーンランドと名づけた。一六五〇年にサミュエル・ヘインズ (Samuel Haines) が最初の定着植民者として移住し、一七一〇年頃にサミュエル・ウィークス大尉 (Capt. Samuel Weeks) が州内に現存する最古のレンガ造りの家を建てたとされる。今回の調査では、一八九七年に設立され、彼の名前を冠した公営ウィークス図書館の地下閲覧室で郷土史家ポール・F・ヒューズ氏 (Paul F. Hughes) に面会し、有島が滞在していた時代のグリーンランドについて取材した。ヒューズ氏は高橋隆氏がこの農場に関する調査を進める際に協力を求めた人物でもある。ヒューズ氏によれば、同じロッキンガム郡にあるエクスターという町で発行されていた新聞「ジ・エクスター・

ニューズ・レター」(一九〇五年七月一四日、金曜日)の「グリーンランド」欄に、有島と思われる日本人に関する記事が掲載されているという。エクスターはグリーンランドから南西に二二キロ、大西洋側から内陸に入ったところにある町で、南北戦争の時代は州の中心とされていた。つぎにこの記事を日本語に訳して紹介しよう。

セッジミア農場には、家事仕事をして休暇を過ごしている二人の若い日本人大学生がおり、一人は農場主のもつで、もう一人は農家を担当して働いた。後者はまったく英語が話せなかったが、それぞれ雇用主の意にかなう働きぶりであった。彼らはきちんとした身なりで、他の人びとに対して礼儀正しくふるまっていた。彼らはボストン・トランスクリプトに投じた広告を通じて雇われた。母国のなまりでしか話せない方は、もう一人よりも賃金が安かった。

At "Sedgenere Farm" there are two Japanese young men, college students, passing their vacation in doing housework, one in the farm-house department. The latter does not speak English at all, but each does his work acceptably to his employer. They dress neatly and conduct themselves toward others very politely. They were obtained through an

advertisement which they inserted in the Boston Transcript.
The one who speaks only in his native tongue asks less wages
than the other.

ヒューズ氏によれば、右の「セッジミア農場」が有島の滞在した農場のことで、農場主E・S・ダニエルのフルネームは「ユーージン・サンガー・ダニエル」(Eugene Sanger Daniel)であった。「Sodge」とはイグサや芝生のようなスゲ属の植物、「mere」とは湖沼を意味する古い英語で、農場があつた場所には、かつて池があつたことから農場の名前として名づけられた。ダニエル家は一八九九年にフランシス・シャンパーナウン大尉からこの土地を購入した。またポーツマスには中国人労働者が多数いたが日本人はほとんどおらず、当時人口約三、八〇〇人のグリーンランドに日本人が来ることはきわめて稀であつた。この記事は善意からでもなく悪意からでもなく、ただ珍しさを感じて報道されたように思われ



新聞「ジ・エクスター・ニュース・レター」
(1905年9月1日、金曜日)

るといふ。しかし二人とも「雇用主の意にかなう働きぶり」であつたうえに「きちんとした身なり」をして「礼儀正しくふるまつた」と報じられていることから、彼らが地元で比較的好意的に迎え入れられたように考えられる。

さらにこの文脈にもとづいて判断すると農場主のもとで働いていたのが有島で、農家で働き母国語なまりでしか英語が話せず賃金が安かつたのが阿部だと推定され、(ボストンで一八三〇年七月二四日に創刊された)日刊紙「ボストン・トランスクリプト」に掲載した広告を通して彼らが雇用されていたことが分かる。同じ日本人青年であるにもかかわらず、英語の能力によつて賃金に差がつけられているのは、能力に応じて待遇の格差が細かく定められている米国外働社会の厳しい現実である。長い夏期休業中に住み込みのアルバイトをすることは米国の大学生にはよくあることで、とくに留学生にとつては語学力を上達させるうえでも効果的である。当時の賃金についてヒューズ氏に尋ねてみたところ、ヒューズ氏の祖父の賃金は一週間九ドルであつたという。この九ドルのなかには住居費や養育費も含まれているので、食費と部屋代を除いて一週間四ドルであつたのは妥当な金額と考えられるようである。有島が滞在していた頃のグリーンランドでは小麦、とうもろこしなどの穀物や果物を生産する農場や、食品の缶詰工場、牧場などがあつた。今日では貨物列車は週一便しかないが、かつてはポートランドとボストンを結ぶ鉄

道を使って毎日これらの作物が輸送されていた。日露戦争終結に際して、グリーンランドの近くにあるポーツマスで講和会議が開かれたが、どちらも米国から遠く離れた国のことなのでグリーンランドの住民は、日露戦争にほとんど関心がなかったという。

実際、農場で働きはじめて約半月が経過した頃、有島は両親に宛てた書簡（一九〇五年七月二日）のなかで近況報告として「小生之住ミ居候ハ僻遠の村とて支那と日本の位置をすら弁へぬ人々多き中ニ御坐候得者戦勝の威光も左程にハ難有がられず日本にてハアイス、クリームを喰ふやとの問題などか時々抱腹ノ種と相成申候」と記している。中国と日本との位置関係さえ分からないのがアメリカ市民の大多数で、日本人はアイスクリームを食べるのかなど話題が「時々抱腹ノ種」になったというほどグリーンランドでは日露戦争に対して関心が払われていなかったのである。

このようにヒューズ氏からさまざまな情報を提供してもらっていると、有島が働いた農場は一九五六年に四万ドルで譲渡され、現在はポーツマススカントリークラブが所有していることが分かった。ウィークス図書館から車で五分ほどの場所にあるポーツマススカントリークラブは一九〇一年創業の準会員制ゴルフ場で、以前はさらに北東の位置にあったが、米軍の爆撃機基地建設にともない移転する必要が生じて現在の場所に移ることになったという（80 Country Club In Greenland, NH）。そこでポーツマススカントリークラブを訪れて経

営者ケビン・ポッツ氏（Kevin Potts）に尋ねたところ、ヒューズ氏の説明通り一九五六年に、鉄道のグリーンランド駅周辺からグレートベイ湖沿い一帯までの二五五エーカー（約一、〇三二平方キロメートル）の広大な土地を買い上げたとし、しかも農場があった頃の写真が貼られている古いアルバムを今も持っているという。そこで早速ポッツ氏にこの私的なアルバムのコピーを依頼したところ快諾を得ることができた。有島が滞在していた頃に撮影されたと思われる写真に付されたキャプションを日本語に訳してつぎに紹介する。

八五年前——これらの写真はコネチカットのマーチン・ダニエルのアルバムのスナップショットからである。ダニエル一族は、四半世紀以上も古いバイアース農場を所有していた。上段の写真には、今使われている地域からドライブウェイの左の場所までの建物が写っている。下段の写真の建物にはダニエル一族が起居していた。これらの建物のほとんどは火事のために焼失した。ダニエル一家は売却の前に建て直した。

「八五年前」とは、移転の年から計算すると一八七一年に当たる。ダニエル一族は「バイアース」（Peirce）家が所有していた土地を購入し、グリーンランドの広大な土地に大規模な農場を営営することになった。この「バイアース農場」も元来は先の「セッジミア農

場」と同じフランシス・シャンパーナウン大尉の土地で、「パイアース」家は一八〇〇年代にこの土地を購入していた。ダニエル一族はグリーンランドの広大な土地に、「ピールス」(Pierce) 家から購入した「ピールス農場」や、先の「セッジミア農場」など複数の農場を所有していた。有島がグリーンランドで働いていた頃の建物は残念ながら、クラブハウスの前にある石造の小屋以外に遺されていない。ユージン・シニア・ダニエルの孫に当たるジェア・R・ダニエル氏 (Jere R. Daniell) はニューハンプシャー州ハノーヴァーにあるダーツマスカレッツの史学科の名譽教授で、ニューイングラ



「85年前」(1871年当時)の農場

ンド地方史をオーラルヒストリーの観点から叙述した研究で知られている。数多くの著書のなかでもニューハンプシャー州における一六〇〇年から一七七五年までの植民地期と、一七七五年から一七八三年までの革命期との歴史的發展を考察した「植民地のニューハンプシャー (Colonial New Hampshire)」(叢書「アメリカ植民地の歴史」第一三巻、一九八一年、K T O 出版) は米国歴史学会において高い評価を受けている。同著には一九〇〇年代の記述はないものの、ニューハンプシャー州においてどのようにして植民地が形成され發展したのかが体系的に論述されている。

三

『迷路』のAがボストンでの学業を中断して農場に赴ききっかけになったのは、二人の女性から逃避するためであった。ボストンで共同生活を送っていた弁護士Pの夫人と不義の関係を結び、たとえ彼女と離婚するつもりであったにせよ、Pは怒り、心頭に発しAに対してピストルを突き付けることになる。このときPの顔は「妻が主動者でないために満足を、皮膚の黄色い猿のやうな劣等人種の挑みに敗けた不満足を」表していたとされる。この後、AはPの家を出て社会主義者の友人Kと同居しはじめるが、Kの影響を受けた論文を日本の雑誌に発表すると、予想した以上の「恐惶」を家族や親類に与え「学費の杜絶」に至らせる。「自活」の道を模索したAはゴ

シック芸術研究の権威であるM教授の研究室の助手として務めることになって娘デュリアとフロラと親しくなるものの、相手の気持ちと十分は付度しないまま、デュリアに愛を告白したために「あなたは東洋の方ですよ。よござんすか。お忘れになつたんぢやありませんまいね」といわれて突き放されてしまう。Aは「P夫人との忌はしい関係」と「デュリアとの愛の破綻」を経験したうえに、P夫人から懐妊したという手紙が届き、この手紙を読んで彼女に墮胎をさせるべきだと主張するKとの間で激しい口論になる。そしてついにKとの同居も解消しなければならぬ羽目に陥って、「二三の新聞に家庭の仕事に雇はれたいといふ広告」を出したところ「ポストンから汽車で五十分か、ある大地主の家」にすぐに雇われて住み込みで働くことになった。

しかし心の平安は得られず夜になると「P夫人の胎に宿つてる肉塊」のために苦悩することになる。そこでP夫人に会うために農場管理人に無断でポストンに戻ろうとするのだが、Aが乗り込んだ汽車には、日露戦争に強い関心を抱く「幾組かの男女」が「小ぼけな」の噂話をし、Aが日本人であることを知った「老人」は「小ぼけな勇ましい」[B]の為に三度万歳と騒ぎだす。するとたちまちAは「不快」を感じて「皮肉な軽蔑の心持ちがむら／＼と起つて来」、自分が「国籍のない浮浪人」として生きようとしていたことに気づかされる。

元来「黄禍論」は、一八四八年のカリフォルニアにおけるゴールドラッシュをきっかけに金鉱や大陸横断鉄道建設の労働者として米国西海岸に殺到した中国系移民に対する白人階級の差別意識から生まれたものだが、日清・日露戦争以後、軍事力を背景に東アジアで台頭した日本に対する批判が強まって日系移民に対する差別が拡大した。作品に戻ってみるとPの表情にもデュリアの言葉にも「黄禍論」の影響を受けたところがあるといえる。それぞれの場面でAはそれほど強く人種差別を意識させられなかったものの、白人女性との間に子どもができることになると差別を感じはじめ、これまで「国の区別を立て、人に接する事を忘れ」、自分の前には「人は人として写らなかつた」ことを思い返しながらか、つぎのように自分に言い聞かせる。

この戦は大きいぞ。日本が露西亜と戦つてる間に、貴様は貴様で戦ふべき戦があるのだ。貴様は国籍のない浮浪人なばかりか、どの階級にも属しない真裸かな人間なんだ。それは貴様が遠の昔に気が附いてゐてい、筈のものだつたんだ。貴様はまだ小さくつて弱い。然し貴様の敵はあの政治狂の爺がいふ露西亜でもない。唯物主義のKのいふ有産階級でもない。生活そのものなんだ。

祖国がロシアとの戦争を遂行している間、自分自身の戦いを発見したAは、自分が「国籍のない浮浪人」であるだけでなく「どの階級にも属しない真裸かな人間」として生きていることに気づき、今の自分にとっては、ロシアでもなく有産階級でもなく「生活」こそが敵であると考ええる。自己の抑えがたい性的衝動のために二人の女性との関係を壊し、「自活」の道を模索していたAにとって、やがて生まれてくる「哀れな混血児」とともに、人種差別に耐えながら生きてゆかなければならないという現実的な課題が眼前に突きつけられたのである。P夫人の家から農場に帰った深夜、自分の部屋で「如何なる父も私以上には強く愛しなかつた。愛する所に権利がある。さうだ。愛のある所に権利がある。私はこの権利によつてあなたに訴へる。子は私に返へせ」と手紙に書く。冒頭の「如何なる父も私以上には強く愛しなかつた」という言葉には、もはや自分は〈父〉に依存してきた〈子〉ではなく、これからは〈子〉を保護する〈父〉としての役割を引き受けて生きようとしていることの強い自覚が込められている。ここでは国家や階級、宗教という抽象的なものを超越して眼前の「生活」という具体的なものに対する戦いがはじめられたことが意味されており、Aは「哀れな混血児」の将来を案じて「黄色人種の血を半分享けたその子は、生れるとどんな軽蔑と敵視との的になる事だらう」という人種差別による生の根源的不安によつて自己の性的衝動を抑制し、いわば〈去勢〉というプロ

セスを経ることによつて現実的な課題と真に向き合える主体を形成することができたのである。

哀れな混血児は育つて行く。黒い硬い真直な黒毛と、青い眼と、白と黄との漆喰をこね合はしたやうに沢のない濁つた皮膚と、病的に痩せこけた体格とを持つた哀れな混血の私生児は育つて行く。彼れを見る眼はどれも彼れを爪弾きする。彼れに与へられた食物は、彼れに穢太臭い労働を要求する。見世物小屋の舞台か、靴磨きの台の下か、孤児院の台所か、感化院の矯正室か、監獄か、火葬場か、…それ等が彼れには一番似合つた背景なのだ。彼れの奇怪な眼は、人を空睨みする奇怪な眼となり、彼れの物いはぬ口は、呪詛だけをいふ物いはぬ口となるのだ。誰にも愛されない彼れは、憎む事すら知らないで死んで行くだらう。

右の引用文には、今日では使用しない差別表現が含まれているが、有島はあえて差別感情を煽るような言葉を連ねることによつて、Aが「哀れな混血児」の将来について深刻な不安を感じていることを強調している。「迷路」の結末部において、この胎児はP夫人の嘘であつたことが絶命寸前のKの口から明らかにされるのだが、本多秋五氏が「箸にも棒にもかからぬ駄作」であると酷評したこと

をふまえて^③、山田昭夫氏も「Aは父性愛と責任感とを混同」してお
り、思想小説・観念小説として読んでも失敗作であると指摘した^④。

従来はこのように作品が否定的に読まれることが多かったのだが、
これらの見解に対して作品を肯定的に読む最も説得的な論を提示し
たのが江種満子氏で、江種氏は作品に否定的な論者には「近代家族
主義のイデオロギーの浸透」が見られるとし、「アメリカの白人社
会から疎外されている日本人だという自己確認は、やがて混血児と
してAよりもっと酷薄な疎外を身に受けるであろう息子でさえも、
Aにとっては自分の存在の意味を証明するかけがえのない人間にな
る。これが差別され疎外された者にとつてのアイデンティティのか
たちである」と主張する^⑤。さらに李甲淑氏が指摘したように「迷
路」は「国境や人種、階級の差などを乗り越え、グローバルな地球
社会へ向けて進むことが要求」されている今日の「時代を先取り
し、次世代の我々の運命へのヴィジョンを提示」する作品であると
考えられる^⑥。日系移民が多かったハワイや西海岸に限らず、ボスト
ンのような東海岸の大都市でも保守的な白人階級の間には、黄色人
種に対する差別意識が根深く存在していたことを、有島は自己の鋭
敏な感覚をもって看破していたのである。「哀れな混血児」ととも
に人種差別に耐えながら生きることを主体的に決意するAの姿勢は、
欧米社会に浸透していた白人至上主義に抵抗するだけではなく、自
己中心的な民族感情にとらわれがちであった近代日本社会の対極に

位置するものでもあった。

四

有島は当初の予定を繰り上げて農場を去ることになったいきさつ
について、両親に宛てた書簡（一九〇五年七月二四日）のなかでつ
ぎのように説明している。この書簡は冒頭に「於ケムブリツヂ」と
あるので、ボストンに引き上げた後で投函されたことが分かる。

遂ニ働きつゝ、ありし家を去る事と相成申候 向にてハ非常ニ
惜ミ是非引止めんと致申候得共ニ働きつゝ、ありし友の一方な
らず衰弱し殊ニ厭ハしき事誼其家との間ニ起り候為め不愉快な
る夏期之消光ハ堪え難たしと思ひきわめしニて候ひき一度決心
致申候事のかく途中にて変更候事小子ニハ呉々も遺憾ニ御坐候
得共是も詮方なき次第是より他ニ方法を講ずるの外無之候

この書簡によれば、有島が農場を去ったのは友人が「一方ならず
衰弱」し、その友人と「其家」との間に「殊ニ厭ハしき事誼」が発
生したことのためであったという。厭わしいと感じられたできごと
の具体的な内容は分からないのだが、「不愉快」「堪え難たし」とい
う言葉が使われていることから判断すれば、たとえ「非常ニ惜ミ是
非引止めん」としてくれたにせよ、何か深刻なトラブルが発生して

いたと考えられる。『迷路』のなかでは、Aは「女中よりも肥えてる癖に恐ろしく性急な地主の細君」が「出来損つた麵麩をつきつけてがみく／＼と怒り出す様子」を脳裏に浮かべて「苦笑」させられる場面や、「東洋人は妙な魔法を遣つて不連の種を蒔く」と信じた「愛蘭土生れの下女」がAの「顔や仕草が余りこはくて、ゐた、まれなくなつた」といつて農場管理人のところに逃げてゆく場面がある。ヒューズ氏はグリーンランドでは日本人に対する関心が薄かつたと語つたが、Aは「下女」に対して「汽車が出来たり汽船が出来たりすると東洋人も西洋人もありはしないんだよ」と論じて「東洋人」に対する蔑視を戒めている。『迷路』では突然、ポストンにあるC慈恵院に收容されているKから手紙がAの許に届き、瀕死のKを見舞うためにポストンに急いで帰ることになつたとされており、農場主の一家とのトラブルがあつたことは書かれていない。Aは出発する前に「村の傭人周旋所」に駆けつけ、「残る一ヶ月半の傭期限」に対して「自分の収入からある高の金を増して」新しい労働者を「無理に」雇つて自分の交替要員とした。このようにKの手紙によつてポストンに帰るといふフィクションが設定された『迷路』では農場での生活が理想化されて描写されている。

労働の手はいくらあつても足らなかつた。Aは台所の仕事から野良の仕事に廻された。それこそ彼の望む所だつた。この

自然の大きな舞踏を見ると、沈み切つた彼れの心もさすがに躍り立たないではゐられなかつた。大地を何よりも愛する彼れに取つて畑に出て働く程の幸福はないらしく思へた。彼れは自分の二倍もありさうな労働者の中に交つて、収穫車に乗つて野良に出かける身となつた。地主の細君が彼れに代つて玉のやうな汗をかき／＼、台所をした。

小麦と燕麦の収穫期に入つて、「台所の仕事」から「野良の仕事」に廻されたAは「畑に出て働く程の幸福はない」ように思へたという。Aにとつて「自分の二倍もありさうな労働者」とされたポーンド系移民労働者は「凡てが自然から切り取つたばかりの男たち」と形容されている。ヒューズ氏によれば当時、一般の米国市民の間では、ポーンド系移民はロシア人として一括りにされて扱われていたが、実際にはポーンド人の他にウクライナ人も多数存在していたという。

労働者の大部分は日露戦争が始まつてから故国を離れて米国に漂浪して来たポーンドの人たちだつた。大抵のものは英語が通じなかつた。然しポーンド人と聞くとは何故か彼れの親しみは極度に湧き上つた。四五人のポーンド生れの猶太人を除けると、彼等の凡ては自然から切り取つたばかりの男たちだつた。

「凡てが自然から切り取つたばかりの男たち」という表現は、『カインの末裔』（『新小説』第二年八号、一九一七年七月）でも主人公の小作人広岡仁右衛門が「自然から今切り取つたばかりのようなこの男」と形容されているように、「自然」から「自然」の荒々しさを分け与えられた小作人こそが厳しい「自然」に立ち向かうことができると思われる。『カインの末裔』が一九一七年六月一三日に脱稿され、『迷路』の初出形「迷路」と「暁闇」とが同じ年の一〇月二〇日と二月二日とに続けて脱稿されていることを考えれば、実際の場所は異なるものの、「自然に齒向う必死な争闘」が繰り広げられる開拓農場が作品の舞台とされた両小説の間には、人間の力をはるかに凌駕する「自然」のエネルギーを通じて、頹廢した現代の都市生活者にはもはや不可能な、人間本来の原初的生命力に富んだ「本能的な生活」が実現できると信じた有島文学の基本的モチーフが共通しているといえよう。

他方、一八九〇年から一九二〇年までの間に米国に到来した一、八〇〇万人の移民は、南欧・東欧から移動してきた「新移民」と呼ばれる人びとが大多数を占め、それまで主流であった西欧・北欧からの移民よりも一層貧困で、一般の米国市民の眼には異質な民族として映った。カトリックのイタリヤ人四〇〇万人、ロシアでのボグロム（大虐殺）を逃れてきたユダヤ人二〇〇万人、カトリックのポーランド人一〇〇万人が「新移民」のなかに含まれ、教育も受けず熟

練技能を持たない農村出身のポーランド人の多くは最低の賃金と最悪の労働条件を強いられて、製造業や鉱山業などの危険の多い分野に就職し、米国社会の下層労働者階級を形成したとされる⁷。有島は「四五人のポーランド生れの猶太人を除けると」という表現を使っているが、この時代ユダヤ人はヨーロッパのどの都市においても居住制限が設けられ、ゲットーと呼ばれる狭い区画に住むことが義務づけられていた。ロシアでは、一八八一年と一九〇三年、一九〇五年に大規模なボグロムが発生し、膨大な数の犠牲者と難民が出た。ポーランド系ユダヤ人の大半は農村ではなく都市で生活していたために、有島は他の農村出身のポーランド人と区別して、「ポーランド生れの猶太人を除けると」という表現を使ったのだと思われる。

正直をいふと彼れは新しい文明の出発点を彼等に見出したやうに思つた。彼等の心があのみ、で成長したら、今の文明を覆へすに足る美しい文明が生れ出るに違ひないと思つた。彼等と同じ生活を生活するのを彼れは喜びとさへ感じた。

Aは農場でともに働くポーランドからの移民労働者に「新しい文明の出発点」を見いだし、彼らの心が「あのみ、で成長」したら「今の文明を覆へすに足る美しい文明が生れ出る違ひない」と思つたという。国家や階級、宗教という抽象的なものを越えて眼前の

「生活」に専心して生きる人間の姿が理想化されている。ここには「神の同労者」（『コリントの信徒への手紙 二』第三章九節）として勤勞するピュリタンの禁欲主義的な信仰に通じるものも見られるが、「如何なる父も私以上には強く愛しなかつた」という言葉に見られたように、ひとたび信仰を離れたところにこの理想が生まれていたことを考えれば、ファウストが労働に勤しむ開拓農民の生活に対して「日々自由と生活を闘い取らねばならぬ者こそ、自由と生活を享くるに値する」と独白し、「自由な土地の上に、自由な民とともに生きたい」と自己意識の革新とともに新しい社会の到来を夢想したゲーテの主張に近いものがあるといえる（『ファウスト 第二部』第五幕、一八三三年）。Aの眼に理想と映じた農場での「生活」は、『カインの末裔』との間でモチーフの共通点が見いだせるだけではなく、作品の執筆から五年後、自分の農場を解放する際に小作人の境遇と心理を理解するうえでの大切な手がかりになったと思われる。

だが契約の途中で農場を去った有島の労働体験と照らし合わせてみると、現実はどうであったか。両親に宛てた書簡にも農家で働いていた友人が「一方ならず衰弱」したと記され、『迷路』にも「野良の仕事は他所で見た程楽なものでも楽しいものでもなかつた。殊に彼れのやうに他の人々に比べて体力の著しく劣つた場合にはさうだつた」とある。有島自身は「其家」との間に「殊ニ厭ハしき事誼」

が発生したことを契約打ち切りの原因としていたが、「きちんとした身なり」をして「礼儀正しくふるまつた」という日本人青年にとつて「野良の仕事」は実際には過重な負担と感じられたはずである。

彼の意気組みだけは労働者等の生活をもつと理想的に生活する積りだつたのだが、無理な姿勢の為に体が痛むのに気がついて眼を覚して見ると、書物の上に伏つたり、ペンを落としたりしてそのまゝ、眠りこけてゐる自分を見出して涎を拭きながら苦笑した。

Aは農場での「労働者等の生活をもつと理想的に生活」するつもりだったが、実際には自分の身体が「労働者等の生活」についてゆけずに「苦笑」させられることになる。内田満氏は『迷路』における「積極的な虚構」として、AとPとの情交、Aに対する学費仕送りの途絶、AがKのために通夜をすることという三点をあげ、それらを通じて有島は「神は信じうるか」、「神なしに生きうるか」というテーマに取り組もうとしたと論じた⁵⁾。これらの「積極的な虚構」に加えて「生活」を過度に理想化させていたことを考えると、有島が自己の労働体験をふまえながら作品に描こうとしたものが何であつたかが分かる。本多秋五氏は「歴史の排泄物に厚く覆はれた地球上のどこにも『真裸な人間』などゐるはしないのだ」と痛罵したが、有

島は「生活」の理想化を通じて、頹廢した現代の都市によって生み出された差別とは無縁の「真裸な人間」が現れることを期待したのである。「宣言一つ」(「改造」第四卷一号、一九二二年一月)のなかで「思想と実生活を融合」させて生じる現象は「人間生活の統一を最も純粋な形に持ち来たすもの」であると主張し、有島は自己の思想と実生活を「統一」させるために一九二二年七月一日に農場を小作人に解放した。だがそのあまりに性急な行動の結果、悲劇的な最期を迎えるに至ったことを考えれば、「労働者等の生活をもつと理想的に生活」することができなかったAの「苦笑」は「苦笑」するだけに終わらなかつたといえるだろう。

注 有島武郎の本文は『有島武郎全集』(筑摩書房)から引用した。旧字体は新字体に改めている。なお有島の本文中、今日では使用しない差別表現があるが、作品の歴史的背景を知るために、そのまま引用した。

- (1) 「年譜」『有島武郎全集』別巻、一九八八年六月、二二〇頁
- (2) 小玉晃一「明治の横浜―英語・キリスト教文学」(一九七九年四月、笠間書院) および栗田廣美『亡命・有島武郎のアメリカ へどこでもない所への旅』(一九九八年三月、右文書院) 参照。
- (3) 本多秋五「日本リアリズム最後の作家―有島武郎の文学」(「文学」、一九五三年二月、九一―九二頁)
- (4) 山田昭夫『有島武郎・姿勢と軌跡』(一九六六年七月、右文書院、六三頁)
- (5) 江種満子『わたしの身体、わたしの言葉 ジェンダーで読む日本近代文学』(二〇〇四年一〇月、翰林書房、三八四頁)

(6) 李甲淑「有島武郎『迷路』論―Aにおける〈生活〉の意味について」

『国学院大学大学院紀要』第三〇号、一九九九年三月、二二九頁

(7) 志邨晃佑「革新主義改革と対外進出」(『アメリカ史』2)、一九九三年七月、山川出版社、一〇四、一〇八頁

(8) 内田満「有島武郎の創作方法(上)」(『同志社国文学』第一〇号、一九七五年二月、八一―八三頁)

(9) 前掲(3)と同じ。

―おにし・やすみつ、三重大学人文学部教授―